
慈 恵



平成27年 冬季号

No.53

宗教法人 慈 恵 院 付属 多摩犬猫霊園



達磨自画賛

白雲幽石を抱く

九十三 耕山

ダルマ図は、五十歳のころより学ばれたが、そこに老師らしい面目が発揮されるのは、八十年代後半からと言えよう。

とくにそのころから、澄んで明るく、大きさと自由さを急増し、このように見事に深化された。『天下一品』と言っても過言ではあるまい。

おそらく書も同じであり、坐刻の貌とでも称すべき、その風貌も同様と思つ。

ことにこの作は光彩を放ち、老師の代表的な一点に相違ない。

「禅画報」より

小僧の頓智

大智が初めて寒巖に参じた時は、まだわずかに七歳であった。母に連れられて来て師に謁すると、その前に饅頭が出てあった。寒巖はその饅頭を与え、自分も食べながら話しかけた。

「坊や、おまえは幾つかな」

「七歳になります」

「名は何というのか」

「万十と申します」

大智の幼名は万十といった。寒巖はこれが饅頭と同じ音なので、たわむれに、

「万十が饅頭を食う時にはどうじゃ」と問うた。すると万十は、「大蛇の小蛇を呑むがごとし」と答えた。これには寒巖も感心し、なかなか利根な子だ、小知恵があるというので、弟子にして、小智という名を与えた。

しかし、のちに「小智は菩提を妨げるといふから小智ではいけない」と、みずから大智と改名したのである。

「禅門逸話集成」より

大智 (二二九〇～一三六六)

曹洞宗。肥後の人。七歳、大慈寺の寒巖について出家。建長の南浦紹明などに参じた後、加賀大乘寺の瑩山について嗣法。その後、元に渡り古林清茂、中峰明本などを歴参して帰国し、獅子山祇陀寺、鳳儀山聖護寺に居す。

冬 じよみ

2 月	1 月	12 月	
2 / 14 涅槃会	1 / 1 修正会	12 / 31 除夜の鐘 12 / 6 成道会	当山行事
● 2 / 19 雨 水 ● 薩埵富士雪縞あらき 雨水かな(富安風生)	● 1 / 6 小 寒 ● 小寒や枯草に舞ふ うすほこり (長谷川春草) ● 1 / 21 大 寒 ● 大寒の大々とした 月よかな(一茶)	● 12 / 7 大 雪 ● 大雪や茎ばかり掃く 藤落葉(涙人) ● 12 / 22 冬 至 ● 粥くふも物しりらしき 冬至かな(一茶)	二十四節気
2 / 11 建国記念の日	1 / 7 人日の節句 (七草) 1 / 11 成人の日	12 / 23 天皇誕生日	祝日等

「じよみ事典」東京美術 参考



ペットの観察日記から 自分史が

府中市 ペンネーム
こばやしそうしん

ペットのことを話したり聞いたりする時は、どの人の目も慈愛に満ちている。誰でもそれだけの温かい眼差しを注いでいたからだろうと思う。長い間、生活を共にしていると、かけがえない家族の一員となる。昼となく夜となく無防備な態勢で寝ている時の様子などは誰でも思わず目を細め癒されてしまう。ゆえにペット、いや大事な家族のことを書くとなると誰が書いてもやさしい筆になるのだ。

理解が深まるし情が湧いて表現の幅も広がる。昨今は自分史作りがブームである。定年近く時間的な余裕が出来て自分を振り返るようになると、誰でも一度は「自分史を」と考えるようである。しかし、思い立っては見たものの実際に刊行に至る人は決して多くはないようだ。何故なら一冊の本を完成させると言うことは決して簡単ではないから。特に書き始めの第一歩、そして書き始めてからも自分自身の半生をまとめ一冊分の文字にすることは意外に難しい。最初は美辞麗句を並べ、「我が栄光の時」を書こうなどと意気込んでみても、次第に現実と思ひ込みとが乖離して最後には書く意志も萎えて来る。結局、自分自身を観察する目

の目で自分自身を観察しながら書いて見てはどうかと思う。自分史と言うよりも、別人の目で自分自身を見るように書いてみるのだ。そうなると自分を美化したり卑下したりと余計な修飾は必要無い。ありのままの冷静な読者目線の文章に近づくだらう。刊行の目的は誰かに読んでもらうことだ。ゆえに自分自身が最初の読者になって感じたことを文字にすれば良いのだ。最も身近な読者であり日常を共有している家族の意見を求めるなども、ペットの観察日記に似て客観性が出て来る。

ペットのことを家族全体の愛情や観察眼で書いたように、複数の目で文章を磨く方法は、一人だけで取り組むよりも質的に大きな向上が期待出来る。観察日記が出来るということは、自分自身の観察も出来ること。家族や周囲の人々と日常を共有する感覚になれば自分史も意外に近道になるのではないかいですか」

猫の恩返し

小平市 平野 佳美(77)

武蔵野大学サテライトへ行くときだった。雨がばらついていたが傘を差さずにバス停の屋根の下に飛び込んだ。ベンチには六十代らしい男性と小型犬二匹がいた。私はベンチの隅に腰掛けた。バス停の前に並んでいる十人ほどの人がジロリ、ジロリとこちらを見ている。犬を人のベンチの上に置いたことを批判しているような目だった。

と断つて種類は分からないが高価そうな犬を撫でた。

男性は犬の散歩に来たのだが、雨が降ってきたので、雨宿りをしてしていると説明した。

私が飼っている猫の話をする、彼も猫を飼っているという。二人であちこちの動物病院の情報交換をした。診療費混雑、態度がいいとか悪いとか。

「こいつら金が掛かるんだよな」と、茶色の犬の尻をたいたいたので、私がたいたらダメ、虐待になりますよと注意した。

しばらくすると、彼はポケットから財布を取り出し、千円札一枚を抜き取り私にくれると言う。赤の他人に小遣いをもらうなんて、とんでもない。びっくり仰天して手を振ると、彼は少し迷った末に千円札を三枚取り出して、私に差し出した。ますます驚いたが、バスが来たので受け取ら

ずにあわててバスに乗った。

なんであの男性は見ず知らずの私に小遣いを渡そうとしたのだろうか。高齢者で女、

だから貧乏だと思ひこんでいるのだろうか。それとも私の身なりから判断したのだろうか。

二、三日して、小平市の「腰痛・膝痛予防教室」の申し込みに地域包括支援センターに行った。道が分からなくなり

配布された地図を見た。人はだれも通らない住宅地だ。

自分の家の庭を見ている奥さんらしい人と運転の準備をしている夫らしい人に出会った。

私は奥さんに地図を渡して、この近くでしょうか、と訊ね

た。奥さんは熱心に地図を見て、近くまで行きます。車で送ってあげましょう、と言う。

私は大喜びで車に乗った。実は出発するときタクシーで行こうかなと迷ったのだ。

座席の前に大きな男性用と見える杖があった。この杖は

誰の持ち物ですかと聞くと、奥さんがうちのお爺さんの物ですと答えた。

「二本、二本、三本道を越えて四本目の道で右に曲がりなさい」と、今まで一言も話

さなかつたご主人が、次回のために私に道を教えてくれる。

包括支援センターに到着すると、奥さんが慣れた様子で車から降りて、私の補助をし

た。なんと、手を差し出されて私はよろめいた。今までそんなことは一度もなかつた。

自分の調子のよさに自分であきれ返った。奥さんは私を抱きとめて、気をつけて行つて

らっしゃいと優しく言った。

あの杖の持ち主は車を降りてからどうしたのだろうか。車椅子で入院？今日は退院

の日で病院に迎えに行くのかもしれない。公立昭和病院が近くにある。親切な中

年の夫婦を見送って、そんな想像をした。

イタリアンレストランに行

った。入り口で、中年の女性とすれ違った。彼女は私を呼び止めて、話しかけてきた。

「ケーキを食べにきたの？」

私は首を振った。

「ケーキの無料券をあげるから使つて」と、チョコレート

ケーキの券を差し出した。

私は一番高いスープパスタとサラダとワインを注文して、

食後に無料券でケーキを食べた。

何でこんなに幸運が続くのだろうか。猫が采配したのかもしれない。十歳の飼い猫の

ナナは歯槽膿漏で、一年ほど前から餌を食べにくくなり、

動物病院で治療している。抗生剤とステロイドの注射で八

千五百円だ。歯の治療をしていないので度々再発する。会計の時に、ナナに恩を着せた。

「八千五百円なんかからね」ナナが気を使い、恩返しをしたのだろうか。